

センター試験後に出願校を変更した受験生の大学入学満足度

—国立B大学の事例より—

竹内 正興 (広島大学)

本研究は、国立B大学の事例から、国立大学一般選抜において、大学入試センター試験受験後に出願校を変更しても大学入学満足度が高い者の特徴を、出願理由から検討することを目的とする。国立B大学新入生アンケート結果からは、大学入学満足者の出願理由に見られる特徴として、大学入学不満足者と比べた場合、第一志望校への合格以外に、大学入学後の学びが出願理由に含まれていることや、多くの出願理由を持っている傾向が見られることがわかった。第一志望校に合格することは受験の目標ではあるが、それは最終の目標ではなく、あくまでも、大学入学後の学びなど将来の目標達成に向けたステップであるという意識を持って最終的な出願校を選定することが、大学入学満足度を高める上で重要であることが示唆された。

キーワード：大学入学満足度、出願校決定時期、出願理由、一般選抜

1 問題の所在

本研究は、国立B大学の事例から、国立大学一般選抜において、大学入試センター試験（以下、センター試験）受験後に出願校を変更しても大学入学満足度が高い者の特徴を、出願理由から検討することを目的とする。

2020年度入試における国立大学の募集人員 95,164人のうち、最も多いのが一般選抜（一般前期日程と一般後期日程の合計）で、全体の 81.9% (77,971人) を占めている（表1）。従って、国立大学への進学を考える場合、多くの者は一般選抜での合格を目指すことになる。

表1 国立大学の募集人員と割合（2020年度入試）

	前期日程	後期日程	AO・推薦	その他	合計
人数	63,810	14,161	16,832	361	95,164
割合	67.1%	14.9%	17.7%	0.4%	100%

出典：文部科学省(2019)

その一般選抜は、1989年度に分離・分割方式が導入されて以降、約30年に渡って基本的にセンター試験の得点と、各大学の個別試験の合計得点によって合否が決定される仕組みとなっている。しかし、実際には、出願校決定における大学入試センター試験自己採点の影響は大きいという指摘がある（高木,2013:56）。また、国立大学の志願者数、入学者数を学部系統別に見ると、工学系の割合が志願者数で約26%、入学者数で約27%とそれぞれ1/4以上を占めるが（学校基本調査, 2019）、その工学部のケースとして、入学者の半数以上が大学入試センター試験の結果に基づい

て出願校を決定している（高地,2014;鳥取大学工学部物質工学科,2004）という指摘からは、自己採点結果に基づく事後出願方式であるセンター試験の受験結果が出願校の選定を左右し、センター試験受験前の志望校に出願できなかった受験生が半数前後に達する可能性があることが窺える。また、実際に、受験生を指導する高校側でも、大学入試センター試験の自己採点結果に基づき、「期待通りに得点できた場合」、「やや失敗した場合」、「大失敗した場合」等に各受験生を分類し、予定していた志望校に出願するのか、あるいは、志望順位を下げて出願するのかについて指導している（螢雪時代 2019）。このように、センター試験受験後の自己採点結果によって、出願校を変更する者が多く、出願校を変更した者は、合格でき入学したとしても、センター試験受験前に設定していた志望校には入学していないということになる。つまり、この事後出願方式は、出願大学への合格の可能性を高める一方で、受験生が第一志望校へ出願することを断念させやすい仕組みとなっているのである。

では、センター試験後の自己採点によって一般選抜の出願校を変更した者は、その大学に合格し入学することになった場合、入学することに対して満足しているのだろうか。また、満足していたとした場合、その理由は何なのであろうか。本稿では、これらの問いに対して、国立B大学新入生アンケート調査（2017年4月、2018年4月、2019年4月に実施）の結果から解明していきたい。

2 調査概要

2.1 調査時期・対象・方法

本研究では第 1 章で設定した問いを解明するため、国立 B 大学の 2017~2019 年度一般選抜で合格し入学した学生 2693 人（前期日程：2216 人，後期日程：477 人）に対して、各 1 年次の 4 月に行ったアンケート調査を分析の対象とした。調査時期を 1 年次 4 月としたのは、大学教育による満足度の変化の影響を排除するためである。また、一般選抜の区分を対象としたのは、出願校決定時期について、「センター試験受験後」を選択した者の出願理由や入学満足度・不満足度の理由を分析するためである。一方、国立 B 大学を対象としたのは、文系・理系の複数の学部系統を有する総合大学であり、まとまったサンプルを確保できると考えたためである。

2.2 質問項目

本研究で利用した質問項目は以下の通りである。

① 合格した入試区分

「推薦入試」，「AO 入試」，「一般前期日程」，「一般後期日程」，「その他」から選択。本調査では、分析対象をセンター試験受験後に出願校変更を行う可能性を有する一般選抜（「一般前期日程」，「一般後期日程」（以下、「前期日程」，「後期日程」）とした。

②現在、在籍する大学についての入学時点での満足度「とても満足」，「まあ満足」，「あまり満足していない」，「満足していない」の 4 件法。

③②を選択した理由（自由記述）

④入学した大学の出願（受験）を決めた時期

「受験の前年（高校 3 年生）以前」，「受験の前年（高校 3 年生）以降夏休み以前」，「受験前年の夏休み以降センター試験受験前」，「センター試験受験後」の 4 件法。なお、選択肢の一部の文言について、回答者に混乱を与えてしまう可能性を検討したが、本稿での分析では、「センター試験受験後」とそれ以外の 3 つの選択肢（「センター試験受験前」）の回答結果の和に限定していることから、文言による回答結果の差異にはつながらない信頼できるデータと判断し、利用した。

⑤出願した主な理由

「1.国立大学だから（学費が安い）」，「2.国立大学だから（ブランド力）」，「3.国立大学だから（その他）」，「4.出身地に近いから」，「5.自分の学力に合っているから」，「6.学生への支援制度が充実しているから」，「7.学びたい学部・学科があったか

ら」，「8.取得したい資格があったから」，「9.就職に有利だと考えたから」，「10.部活やサークル」，「11.高校の先生の勧め」，「12.保護者の勧め」，「13.先輩の勧め」，「14.親戚，兄弟がいる」，「15.確実に合格したかった」，「16.センター試験の結果」，「17.受験科目が合っていた」，「18.その他」の 18 の選択肢から、第一理由，第二理由，第三理由の上位 3 項目までを選択可能とした。

2.3 分析手法

まず、大学入学満足度について、「大学入学満足者」（ $n=2438$ ：「とても満足」，「まあ満足」の和）と「大学入学不満足者」（ $n=201$ ：「あまり満足していない」，「満足していない」の和）の 2 つに分類した。次に、出願校決定時期について、「センター試験受験前」（「受験の前年（高校 3 年生）以前」，「受験の前年（高校 3 年生）以降夏休み以前」，「受験前年の夏休み以降センター試験受験前」の和）と「センター試験受験後」の 2 つに分類した上で、大学入学満足度と出願校決定時期とのクロス集計，および、統計的分析を行った。その際、前期日程と後期日程との間に、大学入学満足度について統計的有意差が見られたため（表 2），試験日程別の分析も行った。

表 2 前期日程と後期日程の大学入学満足度の差 (t 検定)

統計量: t	自由度	p 値	判定
9.2795	2632	0.0000	**

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

また、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」の出願理由の特徴について、「センター試験前・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」，および、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学不満足者」とそれぞれ比較した。

次に、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」の出願理由の選択数と割合について、「センター試験前・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」，および、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学不満足者」とそれぞれ比較した。

最後に、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」の出願理由（自由記述）の傾向を、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学不満足者」と比較した。

3 結果

3.1 出願校決定時期と大学入学満足度とのクロス集計と統計的分析

表3は、出願校の決定時期別に見た大学入学満足度の割合である。国立B大学の場合、前期日程 94.5%、後期日程 83.2%、全体では 92.5%が入学に満足している。特に、「センター試験前・出願校決定者（全体）」では 97.7%とほとんどの者が入学に満足していることがわかる。一方で、「センター試験後・出願校決定者（全体）」では、1割以上にあたる 11.2%が「大学入学不満足者」となっている。特に、後期日程では 21.5%と約5人に1人が不満足という結果であった。また、試験日程別の全体傾向としても、「大学入学不満足者」の割合が前期日程で 5.5%、後期日程で 16.8%と後期日程で「大学入学不満足者」の割合が高い結果となった。

表4は、大学入学満足度別に見た出願校決定時期別の割合である。まず、出願校決定の時期については、センター試験後の出願校決定者が全体では 58.7%と、センター試験前の出願校決定者 41.3%よりも 15%以上多いことがわかる。次に、「大学入学不満足者」を出願校決定時期別に見た場合、全体では 87.4%が「センター試験後・出願校決定者」となっている。一方で、「大学入学満足者」については、「センター試験後・出願校決定者」が全体では 56.4%と「大学入学不満足者」よりも 30 ポイント以上低いことが確認できる。

一方、出願校の決定時期と大学入学満足度との間に関係性があるのかどうかを試験日程別に統計的に確認したところ、全体、前期日程、後期日程ともに 1%水準で有意差が見られ関係性があることがわかった（表5、表6、表7）。

表3 出願校決定時期別に見た大学入学満足度の割合

	試験日程	大学入学満足者		大学入学不満足者		全体 人数
		人数	割合	人数	割合	
センター試験前・ 出願校決定者	前期	915	98.6%	13	1.4%	928
	後期	146	92.4%	12	7.6%	158
	全体	1061	97.7%	25	2.3%	1086
センター試験後・ 出願校決定者	前期	1131	91.4%	107	8.6%	1238
	後期	241	78.5%	66	21.5%	307
	全体	1372	88.8%	173	11.2%	1545
全体	前期	2046	94.5%	120	5.5%	2166
	後期	387	83.2%	78	16.8%	465
	全体	2433	92.5%	198	7.5%	2631

表4 大学入学満足度別に見た出願校決定者時期別の割合

	試験日程	センター試験前・ 出願校決定者		センター試験後・ 出願校決定者		全体 人数
		人数	割合	人数	割合	
大学入学 満足者	前期	915	44.7%	1131	55.3%	2046
	後期	146	37.7%	241	62.3%	387
	全体	1061	43.6%	1372	56.4%	2433
大学入学 不満足者	前期	13	10.8%	107	89.2%	120
	後期	12	15.4%	66	84.6%	78
	全体	25	12.6%	173	87.4%	198
全体	前期	928	42.8%	1238	57.2%	2166
	後期	158	34.0%	307	66.0%	465
	全体	1086	41.3%	1545	58.7%	2631

表5 出願校の決定時期と大学入学満足度との関係
全体（独立性の検定）

カイニ乗値	自由度	p 値	判定
72.5106	1	0.0000	**

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

表6 出願校の決定時期と大学入学満足度との関係
前期日程（独立性の検定）

カイニ乗値	自由度	p 値	判定
53.1582	1	0.0000	**

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

表7 出願校の決定時期と大学入学満足度との関係
後期日程（独立性の検定）

カイニ乗値	自由度	p 値	判定
14.4440	1	0.0001	**

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

3.2 「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」の出願理由（第一）

「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」の出願理由の特徴について、「センター試験前・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」と全体、および、試験日程別に比較したのが図1、図2、図3である。全体、前期日程、後期日程ともに、「1. 国立大学だから（学費が安い）」は出願校の決定時期に関わらず 50%前後と高い割合となっている。また、「センター試験後・出願校決定者」は「センター試験前・出願校決定者」と比べ、「7. 学びたい学部・学科があったから」、「4. 出身地に近いから」の割合が低い一方で、「16. センター試験の結果」が全体で 9.5%、前期日程で 10.3%と 1割前後を占める結果となった。

次に、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」と「大学入学不満足者」を全体、および、試験日程別に比較したのが図4、図5、図6である。「1.国立大学だから（学費が安い）」が、試験日程や入学満足度に関わらず最も高い割合となった。

また、次に高い回答割合（全体）を見ると、「大学入学満足者」は「7.学びたい学部・学科があったから（16.8%）」であったのに対し、「大学入学不満足者」は「16.センター試験の結果（16.9%）」、「15.確実に合格しなかった（15.7%）」となり、「大学入学満足者」と「大学入学不満足者」との間で異なる傾向が見られた。特に、「7.学びたい学部・学科があったから」について、「大学入学満足者（16.8%）」が「大学入学不満足者（4.7%）」より 10 ポイント以上高く、「15.確実に合格しなかった」について、「大学入学満足者（4.5%）」が「大学入学不満足者（15.7%）」より 10 ポイント以上低い点は、「大学入学満足者」と「大学入学不満足者」との間の異なる特徴と考えられる。また、試験日程別に見た場合、後期日程の「15.確実に合格しなかった」の割合が 27.3%と前期日程の 8.4%より 20 ポイント近く高い点は、後期日程に見られる特徴といえる。

一方、「大学入学不満足者」（全体）のその他 8.7%の内訳では、「11.高校の先生の勧め（1.2%）」や「12.保護者の勧め（1.2%）」など、他者からの勧めの回答が見られた。

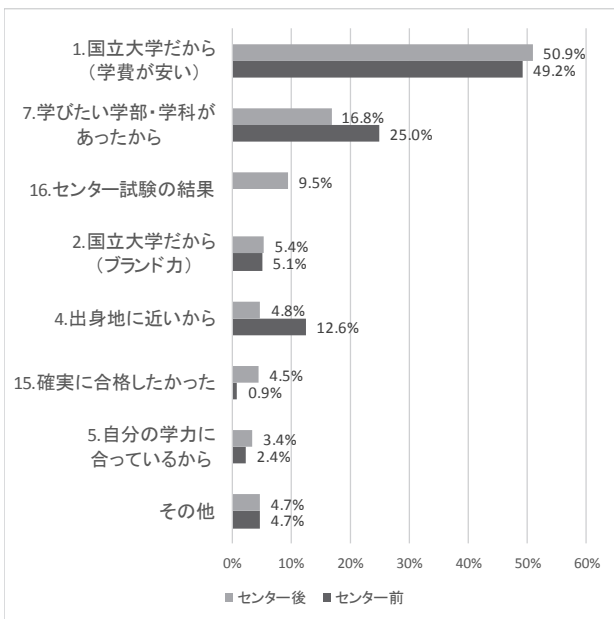


図1 大学入学満足者の出願校決定時期別出願理由（第一）
（センター後・出願校決定者とセンター前・出願校決定者）
全体

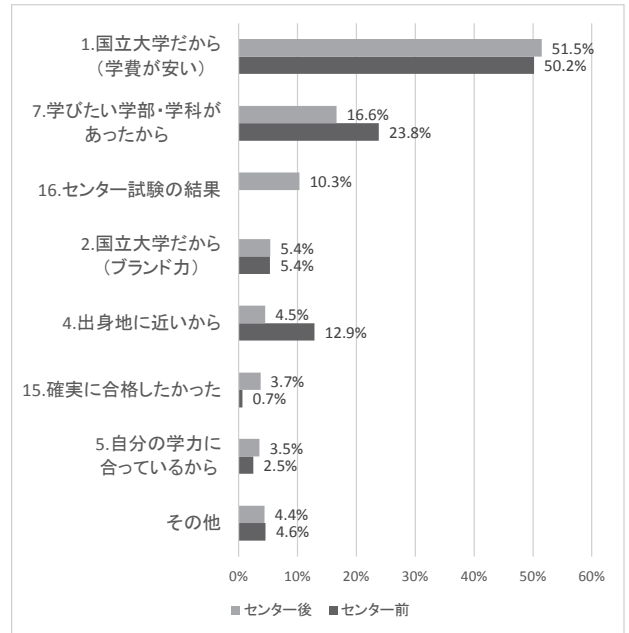


図2 大学入学満足者の出願校決定時期別出願理由（第一）
（センター後・出願校決定者とセンター前・出願校決定者）
前期日程

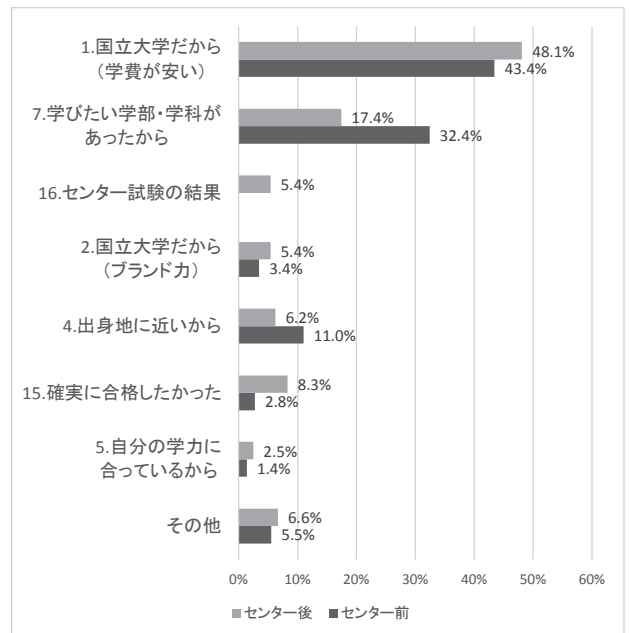


図3 大学入学満足者の出願校決定時期別出願理由（第一）
（センター後・出願校決定者とセンター前・出願校決定者）
後期日程

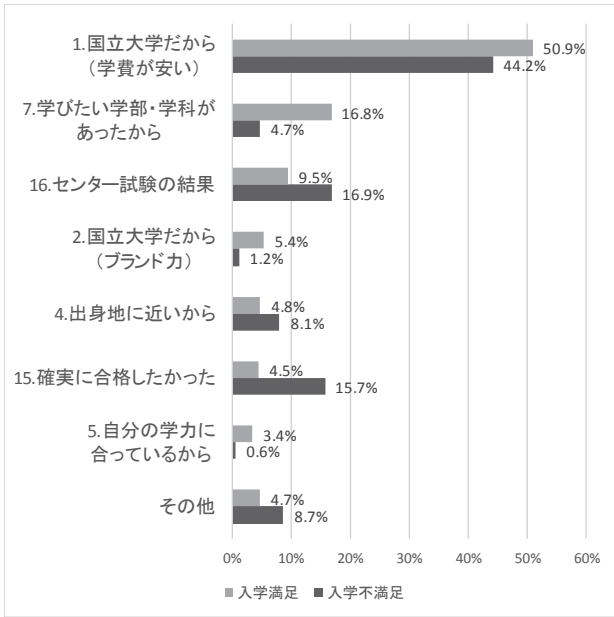


図4 センター試験後・出願校決定者の出願理由（第一）
（大学入学満足者と大学入学不満足者）
全体

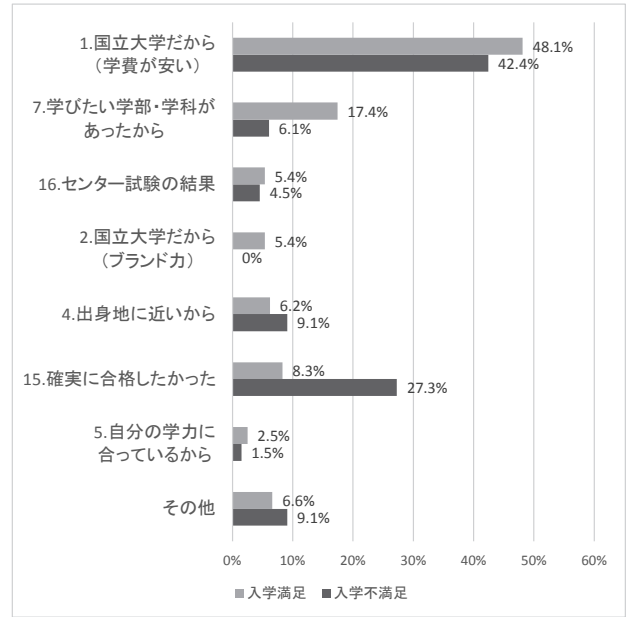


図6 センター試験後・出願校決定者の出願理由（第一）
（大学入学満足者と大学入学不満足者）
後期日程

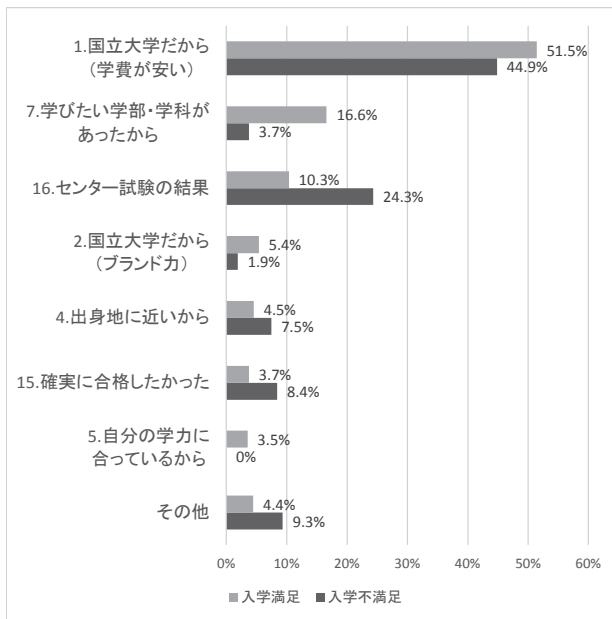


図5 センター試験後・出願校決定者の出願理由（第一）
（大学入学満足者と大学入学不満足者）
前期日程

3.3 「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」の出願理由の選択数と割合

調査では、出願理由について上位3項目までを選択可能としたが、実際に被験者が何項目を選択したのかについて、「大学入学満足者」の中の「センター試験後・出願校決定者」と「センター試験前・出願校決定者」、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」と「大学入学不満足者」別にそれぞれ集計したところ、「大学入学満足者」の中の「センター試験後・出願校決定者」と「センター試験前・出願校決定者」については、第一理由から第三理由までを選択した者の割合がともに90%近くを占め、ほぼ同様の回答割合となった（図7）。一方、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」と「大学入学不満足者」については、第一理由から第三理由までを選択した者の割合が、「大学入学満足者」が87.5%であったのに対し、「大学入学不満足者」は72.8%と「大学入学満足者」が14.7ポイント高く、回答割合に異なる傾向が見られた（図8）。

また、出願理由の選択数について、「大学入学満足者」の中の「センター試験後・出願校決定者」と「センター試験前・出願校決定者」、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」と「大学入学不満足者」について、試験日程別にそれぞれの間に関係性があるのかどうかを統計的に確認したところ、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学

満足者」と「大学入学不満足者」との間に、全体と前期日程では 1%水準、後期日程では 5%水準でそれぞれ有意差が見られ関係性があることがわかった（表 8、表 9、表 10）。

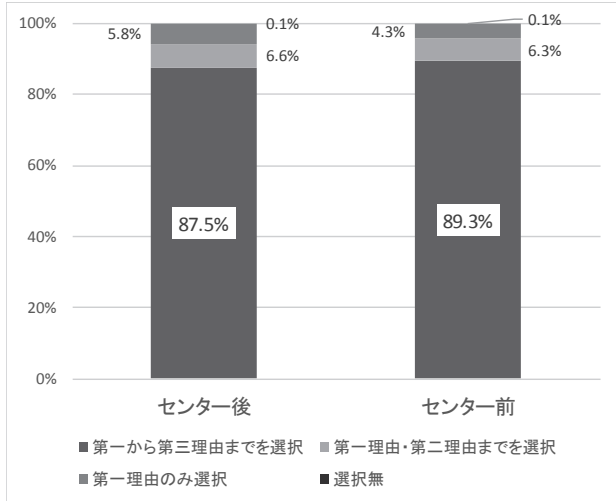


図 7 大学入学満足者の出願校決定時期別出願理由の選択割合（センター後・出願校決定者とセンター前・出願校決定者）

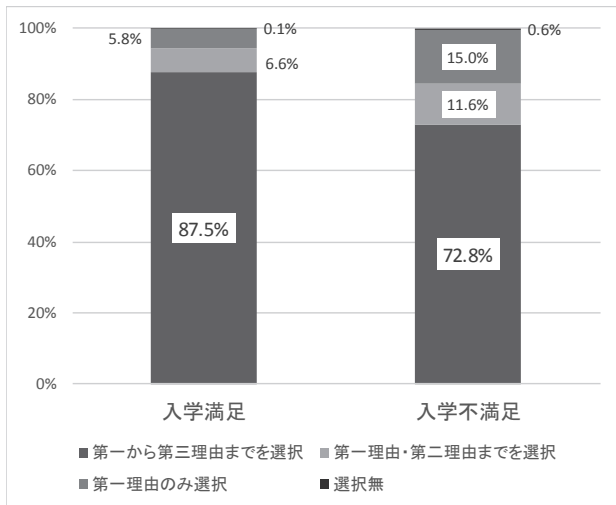


図 8 センター試験後・出願校決定者の出願理由の選択数と割合（大学入学満足者と大学入学不満足者）

表 8 センター試験後・出願校決定者の出願理由の選択数
大学入学満足者と大学入学不満足者との関係
全体（独立性の検定）

カイ二乗値	自由度	p 値	判定
31.5178	3	0.0000	**

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

表 9 センター試験後・出願校決定者の出願理由の選択数
大学入学満足者と大学入学不満足者との関係
前期日程（独立性の検定）

カイ二乗値	自由度	p 値	判定
19.3630	3	0.0002	**

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

表 10 センター試験後・出願校決定者の出願理由の選択数
大学入学満足者と大学入学不満足者との関係
後期日程（独立性の検定）

カイ二乗値	自由度	p 値	判定
9.1885	2	0.0101	*

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

出願理由の選択数が「0」だった回答者がいなかったため、自由度は「2」となっている。

3.4 「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」の出願理由（自由記述）

最後に、「センター試験後・出願校決定者」の「大学入学満足者」と「大学入学不満足者」について、満足、または不満足と感じる理由を自由記述形式でまとめたのが表 11、表 12、表 13 である。なお、自由記述形式で、複数（2人以上）の被験者からあった回答については、内容、語幹の一致を前提として、語尾の最も多い記述方式にそれぞれ統一した。

表 11 は、「大学入学満足者」が入学を満足と感じる理由について、複数（2人以上）の被験者から回答があった内容を一覧にしている。「第一志望ではないが、希望する学部・学科だったから」が 234 人と最も多かった。また、表 12 は、「大学入学満足者」が入学を満足と感じる理由のうち、「第一志望ではないが・・・」の回答（表 11 の回答を除く）を一覧にしている。「第一志望ではないが、国立大学だから」や「第一志望ではなかったが、自分の学力に合っていると感じたから」の複数回答に加え、「第一志望ではないが、学習環境が整っており、勉学に励むことが出来そうだから」、「第一志望ではなかったものの、自分の進路を十分に実現できるものであったから」などの回答が見られた。

一方、「大学入学不満足者」が入学を不満足と感じる理由では、「第一志望の大学ではなかったから」が 43 人と最も多くなった（表 13）。

表11 センター試験後・出願校決定者の大学入学を満足と感じる理由（自由記述）①

第一志望ではないが、希望する学部・学科だったから。(234)
立地・キャンパスの環境・施設・設備がよい。(78)
国立大学だから(学費が安いから)。(49)
(現役で)合格できたから。(35)
国立大学で学びたいことを学べるから。(32)
大学生活が楽しそうだから。(33)
地元で、家から通えるから。(28)
第一志望ではないが、国立大学だから。(12)
就職状況がよいから。(13)
友だちが多くできた。(11)
自分で進学先を決断し納得しているから。(9)
第一希望ではなかったが、自分の学力に合っていると感じたから。(8)
教員免許が取得できるから。(4)
寮が楽しいから。(3)
大学は第一志望ではなかったが、地元の国立大で親も喜んでいるため。(2)
取りたい資格が取れるから。(2)

複数（2人以上）の被験者からの回答内容を掲載。（ ）内は回答人数を示す。

表12 センター試験後・出願校決定者の大学入学を満足と感じる理由（自由記述）②

第一志望の〇〇学部は断念したが、理学部もほぼ同率1位であるため。
第一志望ではなかったが、大学を調べたら少し〇〇大学に興味が出てきました。
第一志望では受からなかったけど、どこにいても頑張ることが大事だと考えるから。
第一志望は〇〇学部でしたが、ご縁がなく、農学を一生懸命学ぼうと思いました。
第一志望ではないが、環境に恵まれていそうだから。
第一志望としていた大学への未練がまだ少し残っているが、自分のやりたいことへの過程として〇〇大学で頑張りたいから。
第一志望ではなかったが、気になる学校のひとつであったため。
第一志望ではないが、ブランド力があるから
第一志望ではないが、学習環境が整っており、勉学に励むことが出来そうだから。
第一志望ではないが、目標への足掛かりとはなる。
第一志望ではなかったが、新たな目標が出来たから
第一志望ではなかったが、どの大学でも楽しめそうな気がするから。
第一志望ではなかったものの、自分の進路を十分に実現できるものであったから。
第一志望ではなかったが、自分が行きたいと思う大学の一つではあった。
第一志望ではなかったが、大学周辺の環境が思った以上によかったため。
第一志望ではないが、研究機関は充実しているようだから。

「第一志望ではないが・・・」と回答した内容（表11の回答を除く）を記載。

表13 センター試験後・出願校決定者の大学入学を不満足と感じる理由（自由記述）

第一志望の大学ではなかったから。(43)
行きたい大学ではなかったから。(18)
前期で落ちたから。(6)
センター試験で失敗したから。(5)
浪人を避けたため。(3)
センター後の第一志望だったから。(2)
本来の第一志望ではなく、半強制的だったから。(2)

複数（2人以上）の被験者からの回答内容を掲載。（ ）内は回答人数を示す。

4 考察とまとめ

問いの設定とアンケート調査の結果を踏まえ、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」の出願理由の特徴について、次の三点から検討したい。

一点目は、表2で示した通り、国立B大学の調査において、「大学入学不満足者」の割合は前期日程よりも後期日程の方が高いものの、前期日程においても、「センター試験後・出願校決定者」の中に1割弱程度が存在しているということである。

二点目は、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」は、志望大学への合格だけでなく、入学後の学びを視野に入れて出願していると考えられることである。図4の「センター試験後・出願校決定者」について、「7.学びたい学部・学科があったから」の「大学入学満足者」の選択率が「大学入学不満足者」よりも10ポイント以上高いこと、また、表11の「大学入学満足者」の満足と感ずる理由について、「第一志望ではないが、希望する学部・学科だったから」が234人となり最も多かったことから、たとえ、入学する大学が第一志望ではなかったとしても、大学入学後の学びが明確になっていけば、入学満足度が低くなりにくいことが一つの要素としてあることが窺える。一方、「大学入学不満足者」については、表13の「第一志望の大学ではなかったから」や「行きたい大学ではなかったから」などに見られる通り、志望大学に合格することだけが出願理由となっており、大学入学後の学び等が視野に入っていないことが窺える。

三点目は、二点目とも重複するが、「センター試験後・出願校決定者」の中の「大学入学満足者」は、図8で示した通り「大学入学不満足者」よりも多くの出願理由を持っている傾向が見られることである。市川(2001)は、「多重の動機に支えられていると、ある動機が弱くなった時でも、他の動機によって持続できる」と述べているが、大学入学後の学び等、複数の出願理由を持ち合わせていけば、たとえ第一志望校に合格できなかったとしても、他の出願理由に支えられ、大学入学不満足というメンタリティを持たずに、大学生活をスタートさせることができると考えられる。

以上、本研究では、国立大学一般選抜において、センター試験受験後に出願校を変更しても、大学入学満足度が高い者の特徴を検討し、大学入学後の学びを見据えた出願校選び、そして、出願理由を複数持つことの重要性を指摘した。もちろん、ヨハン・ガルツング(1972)の「入学試験に合格することは生まれ変わることであり」、原(2010)の「日本において個人の職業や最終的な達成階層を決定するのは、18歳の大学入試である」などに見られる学歴主義の議論がこれまで盛んに行われてきたことは事実であり、学歴獲得のために大学入試で第一志望校の合格を目指すという出願理由自体は否定されるものではない。しかし、国立大学を目指す場合、一般選抜の募集人員が80%以上を占め、その一般選抜はセンター試験受験後の自己採点に基づく事後出願方式となっているため、センター試験受験後に出願校を変更し、第一志望校以外の大学

を受験する可能性はどの受験生にもありうる。従って、本稿で強調したいのは、入学する大学への満足度を高め、大学生活をスタートさせるためには、どこの大学に入学するかだけでなく、入学する可能性のある大学で何ができるのかを出願前に調べておくこと、また、倉部(2019)が進路面談の中の事前提出用シートの安全校出願に対する項目の一つとして「ここに進学することになっても後悔しないと言える」を示しているように、出願の可能性のある大学については、出願前に実際に進学することになっても後悔しないのかどうかを確認しておくことの必要性である。

ただし、出願前の情報収集や心構えには限界があることから、この取り組みを行うことで必ず入学満足度が高くなるとはいえない。また、本調査が一国立大学の範囲に留まることから一般化するためには、今後、複数の大学での調査が必要となる。これらの点については、今後の課題としたい。

参考文献

- 原清治(2010)。「学歴と就業の関連をめぐる問題」山内乾史・原清治編『学歴と就労の比較教育社会学』学文社、36。
- 市川伸一(2001)。「『学ぶ意欲の心理学』PHP新書、211-212。
- 螢雪時代(2019)『センター結果を最大限活かして出願しよう!』旺文社、2020年1月号、118-122。
- 高地秀明(2014)。「入学者の出身県別に見た大学志願行動—平成26年度入学者に対する調査から(教育学部、工学部について)—」『広島大学入学センター年報 第12号』10-13。
- 倉部史記(2019)『ミスマッチをなくす進路指導』ぎょうせい、158。
- 文部科学省(2019)。「令和元年度学校基本調査 高等教育機関 大学・大学院関係学科別大学入学状況」令和元年12月、<https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1419591_00001.htm> (2020年12月23日)
- 文部科学省(2019)。「令和2年度国立大学入学者選抜の概要」令和元年8月、<https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/senbatsu/1412102_00001.htm> (2020年3月11日)
- 高木繁(2013)。「センターリサーチと個別試験受験者の成績分布から見た輪切りの実態」『大学入試研究ジャーナル』23、51-56。
- 鳥取大学工学部物質工学科(2004)。「『学生アンケート結果(平成16年)』、教育自己評価委員会<www.chem.tottori-u.ac.jp/tutor/annke-to-H16.pdf> (2016年9月22日)
- ヨハン・ガルツング(1972)。「社会構造・教育構造・生涯教育」OECD教育調査団『日本の教育政策』朝日新聞社、246-247。